
仮面ライダーイーグル ~マスクドストーリー~

KAKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーイーグル ～マスクドストーリー～

【Nコード】

N1183T

【作者名】

KAKI

【あらすじ】

日本中をキャンピングカーで旅する三人の少年がいた。

めんどくさがり屋のマスクド（本名？） 〓 仮面ライダーイーグル、
熱い正義感を持つセンパイ（あだ名） 〓 仮面ライダーウルフ、敬語
で腹黒で女顔なシンキ（コードネーム） 〓 仮面ライダー森鬼。この
変な名前の三人は、次々と怪人を送り出してくる悪の組織D-I-T-U^{ディーッ}
から、平和な街、永正市を守るのか！？
オリジナルライダーストーリー・マスクドストーリー！

EPISODE 1 三人の少年（前書き）

これはオリジナルの仮面ライダーが活躍する物語です。

自分にとって初めての執筆作品ですので、おかしな文章がありましたら、すみません。

あらすじに三人のライダーとありますが、まだイーグルしかでません。

今回はイーグルの活躍をおたのしみください。

それではどうぞ！

EPISODE 1 三人の少年

ある日。

ある時。

ある世界…

その世界のとある荒野を、トレーラーをけん引した一台のキャンピングカーが走っていた。

中には、三人の少年が乗っていた。

「なあセンパイ、まだ次の町に着かないのか？」

その中のソファでくつろんでいた、髪の毛にはアホ毛があり、パーカーを着た少年が言った。

「うーん、もう着いてもいいはずなんだけどな」

車を運転していた、「センパイ」と呼ばれた、迷彩柄のバンダナを頭に着けた少年が答えた。

「道を間違えたんじゃないんですか？」

雑誌を読んでいた、敬語の少年が言う。

「ちゃんと地図の通りきたんだけどなあ？」

バンダナの少年・・・センパイは、席の横に置いた地図をチラッと見る。

「どれどれ、ちょっと見せてみな」

パーカーの少年が、その地図を取る。

「えーと、右方向に崖があつて、左には湖が・・・ん？」
「どうしたんですか？」

2人の少年が目を向けた湖には、たくさんの人だかりが出来ていた。その中には、赤ではなく、緑色のランプのパトカーの姿があつた。

「緑ランプのパトカー・・・世界警察ですね」

「センパイ、世界警察ってなんだ？」

「世界警察っていうのは、世界規模の犯罪やそれに関係する事件を捜査する機関のことだ。・・・っていうか、お前は世界警察も知らないのか？」

「知らん！」

「堂々と言つな！堂々と！」

2人は小さな漫才をくり広げた。

「それにしても、世界警察が出動する事件なんて・・・一体何が遭つたんでしょう？」

「気になるな・・・センパイ、ちょっと行って見てくれ」

「へいへい。つたく、いつになったら町に着くんだか・・・」

車は湖の方向に進んだ。

くく湖くく

「まったく、一体何をすればこんなことが・・・」

世界警察の警部補、木崎修二は困ったように頭をかいた。

「木崎さん、湖の水が一夜にしてなくなるなんて、おかしすぎますよ」

木崎の部下、島原刑事が弱音を吐いた。

「そう弱音を吐くな、島原」

2人の後ろから40歳位の黒いサングラスをかけた男がやって来た。

「「西城警部！」」

「弱音を吐いてちゃ、事件は解決しないぞ？」

彼が世界警察の西城警部である。

「ですが警部、こんな事が出来るなんて、人間でもない限りできませんよ」

「人間でもない限り・・・か」

西城は、水の無くなった湖を眺めながら言った。

「警部、まさかついにあの組織が・・・！」

木原は西城に詰め寄った。

「その可能性も否定できんな・・・」

「ちよちよちよ！何なんですか！？あの組織って！！！」

今度は島原が2人に詰め寄った。

「ああ、お前にはまだ話してなかったな。あの組織ってというのは・・・」

木原が話そうとした時、規制線の方で騒ぎが起こった。

「ここから先は立ち入り禁止なんだってば！」

「なんだよ。少しぐらい見せてくれたって良いだろ！」

規制線で制服警官とパーカーを着た、15、6歳の少年が言い争いをしていた。

「おいおい。一体どうしたんだ？」

木原が規制線にいたもう1人の警官に聞いた。

「それが、あいつがどうしても入らせてくれて・・・」

警官が半ば呆れたように言った。

「そうか・・・ねえ君、どうしてここに入りたいんだい？」

「どうしてって・・・気になるからに決まってるんだろ！」

「まあ、そんな理由だとは思ってたけど・・・君の名前は？」

「俺？俺はマスクド。よろしく！」

少年・・・マスクドは少し手を挙げて言った。

「あ！こんな所にいたしました！」

「おいマスクド！なにやってんだ！」

「あつ！シンキ、センパイ！ちょうどいい、お前らもこん中入りた
いだろ？」

「なに言ってるんだ！こつから先は・・・」

「入っちゃダメなんですよ！！！」

マスクドに、敬語の少年・・・シンキ、そして、先ほど車を運転して
いたセンパイが注意する。

「と・・・か・・・く、もうどうなってるかわかったんだから・・・さつ
さと戻るぞ！」

「そうですね！・・・あ、すみません、迷惑かけちゃって・・・」

「あ、ああ、いや、別にいいさ。・・・ところで、君たちはこんな何
も無い所でなにをしているんだい？」

木崎はこんな子供が、こんな荒野にいるのが気になっていた。

すると、マスクドを無理矢理、シンキと引っ張っていたセンパイが、
木崎に振り向き口を開いた。

「俺たち、旅をしているんですよ」

「旅？」

「ええ、この日本中をキャンピングカーで」

「日本中を・・・何故だい？」

「何故って聞かれると・・・困りますね」

センパイが渋っている、シンキが代わって喋り出した。

「僕たちの旅に、目的はありませんよ。ただ、あの場所に行きたいとか、行き当たりばったりなんですよ」

「ま、そんな旅に俺たちを連れ出してくれたのが、マスクドなんですけどね。・・・ってアレ？あいつは？」

「あ！？またいつの間にか、どっか行っちゃいましたね」

「ったく、あいつは小さい子供かよ？じゃあ、刑事さん、俺らあいつ探しに行ってくるんで、これで」

「ああ、じゃあね。あ、僕の名前を言ってなかったね。僕は木崎修

二

「俺はセンパイ。・・・あ、これはあだ名ですから」

「シンキです」

そう言うと、二人はマスクドを探しに走り去って行った。

「いろいろ話聞かせてくれありがとねー！」

木崎が二人に叫ぶと、二人は駆け足のまま立ち止まり、木崎の方を振り向き、軽く会釈えしやくをしてから、また走り去って行った。

「ふう・・・」

「木崎さん、子供と長話してないで、事件を調べましょうよ」

島原が、木崎の顔の下の方から、低い姿勢で喋りかけてくる。

「あ、ああ、そうだな。戻ろうか」

木崎は、楽しい旅をしている三人の子供との会話から我に返り、再び仕事に戻る。

湖の方では、西城警部が、手にはめていた手袋をしまい、ほかの刑事達もあとかたずけをしていた。

「何かわかりましたか？」

「お前が話をしている間に、一つだけわかった事がある・・・この湖の水が、何者かによって吸い取られたという事だ」

「でも、やっぱりそれも考えられないですよ〜？」

「考えられない事をやるのが、あの組織だ・・・」

「あ！さっき聞きそびれちゃいましたけど、あの組織って何なんですか〜！？早くおしえてくださいよ〜！！」

島原が木崎にもう一度聞こうとしたところ、またもや騒ぎが起った。今度はこの湖で。

「な、何だあれは!？」

「どうした!？」

西城が、叫び声をあげた刑事に駆け寄ると、その刑事は湖の向こう側を指差していた。

「あ、あそこに、へ、変な怪物が・・・!!」

刑事は、酷くおびえた顔で、そう吐いた。

「怪物なんて、いる訳無いだろ〜?・・・って、いたあああああああ
ああ!!!??」

ニヤニヤ笑っていた島原が、湖の向こうを見た瞬間、顔が強張り、腰を抜かし、地面に尻餅をついた。顔が強張ったまま震えており、もしかしたら、先ほどの刑事よりおびえているかもしれない。

「ききき、木崎さあん。か、か、怪物があ・・！」

「ああ、分かってるよ」

木崎や西城、他の刑事達も、湖の向こうの怪物に銃を向けていた。

『ギョギョギョギョギョギョギョギョオオ・・・！』

怪物は突如、不気味な鳴き声を上げた。

「言え！お前は一体何者だ！！」

西城は声を荒げながら、怪物に問う。

『教えてやろう！俺の名はD-I-T-U^{ディーツ}怪人、シャークファイヤー様だ！』

言われて見れば、その怪物の姿は、口と両腕が鮫^{さめ}の頭の様になっていた。

「なるほどな！やはりこの事件はD-I-T-Uの仕業だったか！」

「でい、でいーっ？」

「D-I-T-U、世界的な犯罪組織の一つだ。奴らは凄まじい科学力で怪人を作り出し、世界のたくさんの美術品や金を強奪し、その地位を一気上げていった、恐ろしいやつらだ」

「す、凄い・・あれ？でもなんでそんな組織が、こんな小さな日本

にやってきて、湖の水なんか奪うんですか？」

島原の意見は的を射ていた。木崎が言ったような、世界規模の巨大な組織が、わざわざ日本の湖にやってきて、その水を奪うなど、おかしい話だ。

『フッフッフ、我々の計画を少しだけ教えてやろう。我々の計画には、純度が高く、澄んだように綺麗な、この湖の水が必要だったのだ。それも大量にな！』

「だがそのせいで魚や他の生き物達も死んでしまったんだぞ！」

『フン！そんな事どうでも良いわ！』

「どうでも良いだとお！！！」

木崎は、怪人・シャークファイヤーに向けた銃の照準を合わせ直した。

「あいては世界的に有名な犯罪組織だ」

「僕知りませんでしたけどね？」

「そして相手は怪人。尚更危険だ。・・・総員、撃てえ！！！」

西城の号令で刑事達は、シャークファイヤーに、一斉に発砲した。
だが……………」

カンカン！キン！コンカン！キン！

銃弾がシャークファイヤーに当たったが、金属が軽く当たったような音がし、弾はバラバラとシャークファイヤーの足元に散らばった。

『D-I-T-Uの科学力で作られたこの俺に、銃弾など効くかああ！！！！』

〃〃湖の奥の茂み〃〃

茂みの中には、タンクローリーが三台あった。この中に湖の水が入っているのだ。

『 さあ、さっさと乗れ！運ぶぞ！』

「了解！」「」

Dトルーパー達は乗り込もうとした。その様子を陰から見ている者がいた。

「こいつら、こんな所に水を・・・」

シャークファイヤー達の後を追って来た、木崎だった。彼は木の陰に隠れながら、いつ踏み込もうかと銃を構えていた。だがその時

「 ちょっとゴメンよ」

「 むぐっ!?!?」

木崎は、突如後ろからハンカチを口に当てられた。そのハンカチには睡眠薬が付いていたようで、そのまま眠ってしまった。

「な、何だ貴様は!？」

木崎が眠り落ちたと同時に、タンクローリーに乗り込もうとしたDトルーパーが声を上げた。

「俺?俺は　　おっと!」

先にタンクローリーに乗っていた何者かが名前を言う前に、Dトルーパーがアクセレイガン>ガンモード<を発射する。が、何者かはそれを軽くかわす。

「名前も言わせてくれないなんて、なかなか厳しいねえ。おら!!」
「ぐああ!!」

何者かは、Dトルーパーに両足蹴りをくらわせると、タンクローリーから降りる。

『貴様!何者だ!?!』

その男は、髪の毛にアホ毛があり、白いパーカーを着ていた。

「俺?俺はマスクド。またの名を　　」

マスクドは、一見すると、平面になった二つの鳥の翼が折りたたまれた機械>イーグルドライバー<を取り出す。

イーグルドライバーを腰に当てると、それを中心にベルトが形成される。

『キーーーーッ!キーーーーッ』

すると、上空に鳥の頭の形をしたメカ、＜イーグルヘッド＞が飛来し、マスクドはそれを掴む。

「 仮面ライダーイーグル！」

マスクドは、イーグルヘッドをドライバーの、二つの折りたたまれた翼の真ん中にセットする。

マスクドはドライバーの左翼の部分に左手をそえ、右腕を勢いよく斜め上につきだす。

「変身！」

マスクドはそう叫ぶと、右手もドライバーの右翼にそえ、両翼を一気に開く。

『EAGLE!』

イーグルヘッドがそう音声を発すると、マスクドは金色の羽につつまれ、背中に金色の翼が現れると、一瞬輝き、光がおさまると、マスクドは黄金の鷲^{わじ}の戦士、仮面ライダーイーグルとなる。

『奴を、仮面ライダーを叩き潰せ!!』

「そっちから来てくれるとは、ありがたいな」

イーグルはマスクの中からは見えないが、余裕の表情をした。

「ハッ！タア！おりゃ！」

「ウアアア!？」

イーグルは、襲い掛かってきたDトルーパーにパンチを繰り出し、

とどめの蹴りを叩き込んだ。

「ワアアア！」

「ハッ、たあ！オラア！」

殴りかかってきたDトルーパーの拳を右腕で掴み、左腕でパンチを腹にお見舞いした。もう一人のDトルーパーも反対方向から攻めてきたが、横蹴りをくらわせて何とかしのいだ。

『ぐうう・・・！何をやっているのだ！？もういい俺がやる！』

いら立つたシャークファイヤーは、Dトルーパーの前に立ち腕をイーグルに向けた。

『くらええええ！！』

シャークファイヤーは腕から二つの火球をイーグルに向け発射したがイーグルは避けようと動こうとせず、そこに立ちイーグルヘッドを一回押した。

『EAGLESWORD！』

イーグルの手に持ち手が金色の剣、<イーグルソード>を出現させ、それで火球を切り伏せた。

「こんな火の玉撃ってきて、俺を焼き鳥にする気かい？」

「ウアアアア！！！！」

「聞く耳持たず、か」

イーグルは呆れながら、剣を構えDトルーパーに突っ込んでいった。

「ハア！」

「ぐあ！！！」

まず一人。

「セイツ！」

「ぐええ！！！」

そして二人。

「タアアツ！」

「うわあああ！！！」

最後に一人を斬り倒した。

サアアアア……

Dトルーパーは灰になって消えた。

「さて、最後はお前だけ　　おわああ！？」

『ギョギョギョ、これなら攻撃できまい！』

シャークファイヤーは腕から出る炎をジェット噴射の様にし、空を飛んでいた。

空から攻撃すれば勝てると思っているシャークファイヤーは、余裕の表情をしていた。イーグルは

「お前、バカか？」

余裕の返事をした。

「お前、俺の名前を忘れたのか？俺はイーグル、鷲のライダーだ。だからもちろん」

イーグルは背中から金色の翼を出現させた。

「空も飛べるわけだ。ハッ！」

『お、お前も空を飛べるのか！？』

イーグルは空中へ高く舞い上がった。

『チツ、まあお前が空を飛べようが俺には関係ない、俺の炎で撃ち落すまで！』

「やれるもんならやってみな！」

二人は空中でぶつかり合う。シャークファイヤーは、今度は口から炎を吐く、それをイーグルは剣ではじく。

しばらくそれを繰り返し返していたが、急にイーグルがシャークファイヤーに接近する。

『何い！？』

「悪いが俺は、さっさと終わらせたいんだ」

イーグルは連続で剣に斬りつけていく。

「はあああああああ！ー！」

「ぐっ！？ぬっっっっっ！ー！」

シャークファイヤーは腕で斬撃を防御していく。

「やっぱりお前、バカだなあ」
『な、何い!?!?…つて、しまったああああ!?!?』

シャークファイヤーは空を飛ぶために使っていた腕を、防御にまわしたため空中から落下してしまった。

「さて、とどめだ!」

イーグルは剣をぶん投げ、イーグルドライバーの翼部分を閉め、また開く。

『EAGLE! WINGBURST!』

イーグルの翼の輝きが増し、イーグルは、必殺技<イーグルキック>を発動する。

「たあああああ!」

落下しているシャークファイヤーにキックで突撃し、そのまま大地に突撃する。

『ギヤアアアアア!』

イーグルと大地に挟まれたシャークファイヤーは断末魔と共に爆発した。

「う、うゝん。な、何が起こったんだ…?」

木崎は先ほどの爆発で眼が覚めた。その爆発でおきた炎の中にイー

グルは立っていた。

「君は・・・一体・・・？」

イーグルは木崎のほうに振り返り、金の翼の様なマスクの中の赤い眼で見た。

「仮面ライダー・・・イーグル」

そう吐くと、イーグルは茂みの奥へと歩いて行った。

「あ、待って！」

「木崎ーーーー！！」

「木崎さ～～～ん！！」

「西城警部！島原！・・・あいつらは・・・？」

「ああ、しばらく戦っていたら、灰になって消えていったよ・・・」

「

「サアアアって消えちゃいましたよ！」

「ところで怪人は？」

西城は木崎に尋ねた。木崎は後ろで燃えている炎に目をやった。

「・・・倒しましたよ・・・仮面ライダーが・・・」

「仮面・・・ライダー・・・？」

～～～キャンピングカー・車内～～～

「 お前、なんかちょっとカッコつけたろ」

センパイは運転しながらテーブルに突っ伏しているマスクドに聞いた。

「 うーん、カッコつけてる気は無いんだけどなあ」

「 それ、狙ってました?」

「 ……ながれでああなった」

「 おい! 町が見えてきたぞ!」

「 意外と早いですね?」

「 そういや、さっきの地図、ページまちがってたぞ?」

「 それを最初に言えよ!」?

「 ぐうゝ、ぐうゝ……」

「 寝るなああああ!」?

車は町に向け走って行く

三人の少年を乗せて

EPISODE 1

END

EPISODE 1 三人の少年（後書き）

次回予告！

センパイ「俺、文句が二つほど言いたいんだが・・・」

シンキ「時間が無いので無理です。それに文句なんて時間が経てば忘れちゃいますよ」

センパイ「ヒドツ!?!」

次回『闇渦巻く町』

マスクド「お前、何気に黒いんだな・・・」

シンキ「フフフフー」

センパイ（アカン！眼が笑ってない!?!）

あとがきや解説は活動報告にて。

EPISODE 2

闇渦巻く町(前書き)

前書きコーナー

マスクド「てーっててーっ EP2はーじまーるよー!」

センパイ「いきなりテンション高いな」

シンキ「あー、ちょっといいですか?」

センパイ「どうした?シンキ」

シンキ「実は作者から「活動報告にお前らの年齢書くの忘れたからやっとして」、というお願いが……」

マスクド「あの作者、また俺たちに押し付けやがって」

センパイ「……とりあえずやるっや」

マスクド 設定年齢 16歳

センパイ 設定年齢 16歳

シンキ 設定年齢 17歳

マスクド「設定年齢とか付けんな」

センパイ「その前にツツコムべきところがあるだろ!？」

マスクド「俺はボケだから分から……ん!? 年上……だと……!？」

シンキ「フフフフー」

マスクド「何だろう、俺、急に怖くなってきたよ……」

センパイ「バカ。そのセリフは死亡フラグだ」

マスクド「二話めから死にたくねえ……」

マスクドが死のことはないので、安心してお楽しみください。

町の外れ……

キャンピングカーの外にテーブルやイスを置き、マスクド達は朝食をとっていた。

テーブルの上には、フレンチトーストが載った三枚の皿があった。

「……またコレか……」

マスクドはフレンチトーストを見つめながら言った。

「仕方ないだろ？材料が少ないんだから」

そう言うと、センパイはフレンチトーストを口に運ぶ。

「あとで買出しに行かなきゃいけませんね」

と、シンキはフレンチトーストに、ハチミツをたっぷりかけながら聞いた。

「そうだな……よし、俺が行ってくるよ。ついでに町を見てみたいし」

センパイはそう言ったが、二人は聞きもせず、「それ、美味しいのか……？」、「美味しいですよ」、「という会話をしていた。

「……………聞けよ」

「さて、買い物もしたし、帰るかな……」

センパイは、二つの重そうな袋をかかえ、帰路に着こうとしていた。ちなみに、袋はマイバツクである。

「それにしても、ここは良い所だなあ……」

この町は永正市^{えいせい}。街の中央には大きなアーケード商店街があり、「永正通り」と呼ばれる。センパイは今ここにいる。

この街には海や山があり、そのシーズンになると、観光客がたくさんやってくる。

「ふう……」

センパイは長いアーケードを抜け、一息吐き、また歩を進めようとしたが……

「センパイさ　　んー！」

後ろから声がした。センパイは、その声に身に覚えがあったのか、声の方に振り向く。

「あれ？美樹ちゃん？」

「お久しぶりです！センパイさん！」

声の主の彼女は、篠原美樹。彼女は、「猛士」関東支部のメンバー

の一人であり、シンキの妹である。

「でも、何で美樹ちゃんがここに？」

「センパイさんこそ、どうして？」

「俺は いや、俺達は旅の途中でここに ……美樹ちゃんは？」

「あれ？お兄ちゃんから聞いてないんですか？この永正市に猛士の関東支部があるんですよ？」

「へえ〜！そうだったんだ。知らなかったな〜」

「まあ、無理ないですね。 ……お兄ちゃん、猛士の事、あんまり話したがりないと思いますし……」

「……………」

二人は難しい顔をし、黙ってしまった。

「……………そういえばさあ、」

口を開いたのはセンパイ。

「美樹ちゃん、なんで髪しばったの？前は下ろしてたのに」

「ああ、最近はサポーターとして山に行くことも多くなって、邪魔なのでしばったんですけど…下ろしてた方が良かったですか…？」

「ううん、それも似合ってるよ！」

「良かった！」

それから、二人は楽しそうに会話しながら歩いていった。

……が、それを後ろから、誰にも見つからないように見ているものがいた。

『キキキキキキキキイイイ……………』

二人は、中央に噴水がある公園を通ろうとしていた。

「……ところで、マスクドさんは元気ですか？」

「元気、元気。もう元気すぎるくらい元気。最近は暇だから昼寝してばかりだけどさ」

「マスクドさんらしいですね……」

美樹はマスクドの姿を思い浮かべ、苦笑した。

「ぶえつくしよん!!……グウー……グウー……」

「寝ながらクシャミしてる……」

シンキは、ディスクアニマルのメンテナンスをしながら、そう吐いた。

ピチャ……

「ん………?」

センパイは何かの水に入るような音を聞いた。だが、噴水で水遊びをしているような子供はいない。

「どうしたんですか？」

「いや、何かがいるような気が……ッ!？」

その時、センパイは殺気を感じた。自分の後ろの噴水から。やはり長い間、危険な場所を旅したりすると、こういう第六感が身につくものなのだろうか。センパイはそれを考えると、すぐ次の行動に移った。

「美樹ちゃん、走るよ!」

「ええええ!？」

センパイは、半ば強引に美樹の腕をつかみ、走り出した。

『キキキ……』

二人をつけていた怪物は、噴水からついにその姿を現した。その姿は猿のようだったが、口からは、長いカメレオンのような舌を出していた。その名は「グリーンモンキー」。カメレオンと猿を合成させた、D T Uの怪人である。

『キイイイイイイイ!!』

「あいつ、猿みたいに身軽だぞ!」

「ヤマビコの童子みたい!」

『キイイイイ!』

グリーンモンキーは、飛び上がり二人の前に着地する。二人は方向転換し別方向へ移動する。するとまたグリーンモンキーが二人の前に。それを繰り返していくうちに、二人は廃ビルの並ぶ裏通りを逃げていた。

そのうち、センパイには一つの考えが浮かんでいた。

(こいつ、俺たちをどこかに誘導してるのか……………?)
「助けを呼ばなきゃ……………!」

美樹は一枚の銀色のディスクを取り出し、音角でそれを叩き空中に投げた。すると、一瞬にしてディスクが緑色になり、ディスクアニマル、「浅葱鷲^{アサギワシ}」に変形する。

「お兄ちゃんたちを呼んできて!」

アサギワシは鳴き声を発すると、キャンピングカーの方向に飛んでいく。

突然グリーンモンキーは二人を追うのをやめる。

「あきらめた……………?」

「いや違う、目的の場所に着いたんだ……………」

センパイは辺りを警戒る。敵がここで追うのをやめたからには、何か罠があると思っっているのだ。

その時、廃墟の奥から、二人の男女が出現した。

『人間だ……………餌だ……………!』

『子供の所に連れて行こう』

男女はそういうと、異形に変貌する。

「怪童子に妖姫…何でこんな街中に!？」

「こいつの仕業だ!俺たちを餌にするためにここまで連れて来たんだ!」

センパイはグリーンモンキーを睨みつける。

『アアツ!!』

怪童子と妖姫は二人に襲い掛かった!

その時!

「ハアツ!」

何者かが二体にとび蹴りを喰らわせた。

『だ、誰だ!?!』

「遅くなりました! センパイさん、美樹!」

現れたのはシンキだった。

「たく、おせえよ」

「はあ、どうなるかと思った」

「すいません、二人とも。それでもマスクドさんがバイクでとばして来たんですけど…」

「まあ良い。じゃあ、久々にいくぞ」

「はい!」

そういうと、センパイはブレスレットのようなものを、シンキは、音叉の「音角」をとりだす。

センパイがブレスを装着すると、イーグルヘッドと似た、狼の頭のようなメカ「ウルフヘッド」が現れ、センパイはそれをブレスに装着する。

シンキは、音角を手につけて、変身音波を発生させる。そして、

音角を額にかざす。すると、額に鬼の顔が浮かび上がり、シンキの身体を、自分のエネルギー源の草木が包む。

「変身！」

「ハアアアアッ……ハアッ！」

『WOLF』

センパイは、ブレスのウルフヘッドの付いた部分を上にあげた。センパイの身体を狼のオーラが包み、センパイは「仮面ライダーウルフ」に変身する。

シンキは、草木振り払うと、鬼戦士「仮面ライダー森鬼」に変身した。

「行くぞ！」

ウルフは怪童子の方に、まるで狼のような荒あらしさで突っ込んでいく。

「それじゃ、美樹は早く逃げて」

美樹がうなずくと、森鬼は妖姫の方に向かう。

「らあ！らあ！」

ウルフは怒涛のパンチラッシュを決めていく。

『うっ…ハッ！』

「何っ！？」

怪童子は口から糸をはき、ウルフをからめとった。

『鬼は死ねっ！！』

「俺は鬼じゃなくて狼だっ！！」

ウルフは何とか腕を移動させ、ウルフヘッドを押しした。

『WOLFCLAW』

ウルフの腕に「ウルフクロー」が出現した。

「うづめっ！！」

ウルフは、ウルフクローで糸を切り裂いた。

『ッ！？』

「どんどん行くぜっ！！」

ウルフは動揺している怪童子をウルフクローで攻撃していく。
最後に、アッパー攻撃で吹き飛ばした。

「とどめだ」

ウルフは、ブレスのヘッドがついた部分を下にさげ、再度上にあげた。

『WOLF!HOWLINGBURST!』

どこからか、狼の咆哮が聞こえ、ウルフクローにエネルギーが集まる。

ウルフは空中に飛び上がり。上空から、ウルフクローで怪童子を切り裂いた。

「らあああああああ！！」

『うあああああ……………！』

必殺の「ウルフブレイク」が炸裂し、怪童子は爆発四散した。

「ハアツ！！」

『うっ……………』

一方森鬼は妖姫と戦いを繰り広げていた。

森鬼の手には音撃棒「樹木」が握られていた。

「たあ！はあ！おりゃ！」

森鬼は太鼓を打つように妖姫を攻撃する。

その攻撃は、音撃棒の先端の鬼石で、「清めの音」が増幅された攻撃なので、妖姫はもうフラフラだ。

「はああああ……………はあっ！！！」

とどめに、音撃棒の先端に集中させたエネルギーを放つ、「ろくろ緑森弾」によって妖姫は爆発した。

「ああ……………!!」
『キキキキキキキキ……………!!』

戦いの場から離れ、隠れていた美樹は、グリーンモンキーに見つけられてしまった。

『キイキイキイキイキイ……………』
「きゃああああああ!!」

その時、バイクの疾走音が聞こえ、一台のバイクが走ってくる。そのバイクの名は「マシンマツハイグル」。それに乗っている者は、フードをなびかせグリーンモンキーに突撃した。グリーンモンキーは吹き飛び、バイクは美樹の前に止まった。バイクに乗っていたものは、ヘルメットのシールドを上げ、美樹の方を向いた。

「大丈夫？美樹ちゃん」
「マスクドさん！」
「遅くなってゴメン」

『キキキ……………お前、何者だあ……………?』
「おや？口も利けない獣みたいな奴かと思ったら、喋れたのか。まあいい、教えてやるよ、俺の名前」

「俺はマスクド。奈良県でシカに地図を食べられたマスクドさ」
「カッコ悪いことをカッコよく言った。」

「もうあつちの二人は片付けたみたいだけど、俺もこつちを片付けようかな」

マスクドのこしには既にイーグルドライバーが巻かれてあった。

「変身！」

『EAGLE！』

マスクドはイーグルに変身し、バイクでグリーンモンキーに突っ込んだが、避けられてしまう。

イーグルはそのまま方向転換し、逃げるグリーンモンキーを追った。

イーグルは、立体駐車場でグリーンモンキーを追っていた。その手には、いつの間にかイーグルソードがあり、グリーンモンキーは柱を本物の猿のように移動していた。

「このお！」

『EAGLE！WINGBURST！』

イーグルソードにエネルギーがたまっていき、金色に輝く。

「たあああああ！！」

ああああ！？」

イーグルは、「イーグルスラッシュ」を放ったが、瞬時にグリーン

モンキーは、カメレオンの様に透明になり、逃げてしまった。

「逃げられたか……………」

そうイーグルは吐くと、バイクで皆の元へ帰った。

四人はキャンピングカーへの帰路についていた。

「なあマスクド、なんで連中は俺と美樹ちゃんを狙ってきたんだ？」

「さあな。適当な餌に選んだのがお前らだったんじゃないか？」

「そんなもんか？」

「そんなもんさ」

「まさか美樹がいるとは思わなかったです」

シンキは呆れたような驚いたような声を出した。

「私だってお兄ちゃんたちがこの街にいるとは思わなかったわよ」

「それにしても、動いたら腹がへったな」

「確かに」

マスクドと美樹は、お腹が減ったため、お腹を押さえる。

「よし、帰ったら飯だな。美樹ちゃんは何が食べたい？」

「そうですねえ……………フレンチトーストが食べたいです！」

「え……………」

マスクドは一気に力が抜け、ガツクリと肩を落とした。

E P I S O D E 2

E N D

N E X T E P I S O D E 3

EPISODE 2

闇渦巻く町（後書き）

次回予告！

マスクド「次こそ当たれ！イーグルスラッシュユー！」

シンキ「たぶん無理です」

マスクド「一瞬で否定するな！？」

次回「鬼、駆ける」

センパイ（今回は新キャラ登場するし、シンキもなんかやらかしそ
うだし、当たったとしても、影薄になるなあ……）

解説コーナー

マスクド「次回予告の件も終わったのに、まだなんかやらすのか…
…」

センパイ「件とか言うな！？」

シンキ「はい、じゃあ始めますよ」

センパイ「スルーもするな！？」

マスクド「ダジャレ？」

センパイ「ダジャレじゃない！！」

シンキ「早く始めましょうよ……」

シンキ「まずはウルフから」

仮面ライダーウルフ

センパイがウルフブレスとウルフヘッドを使い変身した姿。逆立った狼のような姿をしており、体の色は青と銀、目はするどく、黄色である。

するどくがったウルフクローを出現させ敵を切り裂く。荒あらしい戦い方をする。

S P E C

身長：197cm

体重：93kg

パンチ力：6.5t

キック力：11t

ジャンプ力：ひと跳び43m

走力：100mを4.5秒

必殺技

・ウルフブレイク（ウルフクローで敵を切り裂く）

シンキ「イーグルよりをスペック高いですね」

マスクド「……………モデルはガオシルバーらしい……」

センパイ「いきなり衝撃発言するな!？」

モデルがガオシルバーなのは本当です。

シンキ「次は…僕ですね」

仮面ライダー森鬼

シンキが肉体を鍛え、鬼に変化した姿。森属性。武器は音撃棒「樹木」。

魔化魍に音撃を叩き込むときは、音撃鼓「じふくちつしつみ緑葉鼓」を使う。姿形は、分かりやすくすれば、姿は響鬼、色は鋭鬼。

SPEC

身長：195cm

体重：90kg

パンチ力：7.5t

キック力：12t

ジャンプ力：ひと跳び47m

走力：100mを4秒

必殺技

・緑森弾（属性エネルギーをぶつける）

・音撃打「森林連打の型」（連続で清めの音を叩き込む）

シンキ「あれ？オリジナルだと響鬼ライダーズってもっとスペック高かった気が……」

マスクド「あのなあ……」

マスクド「俺たちとバランスとるために低いんだよ……」

センパイ「じゃなかったら怪人なんてお前らパンチ一発で倒してるぞ……」

怪人ども「ビクウツ……」

シンキ「えーっと……なんかすいません」

マスクド「さて、解説も終わったが……」

センパイ「これからも必殺技がふえたらまた紹介するので……」

シンキ「たのしみにしててください！」

三人「次回もお楽しみに……！！」

マスクド」さて、解説の件も終わったし、昼寝でもするかな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1183t/>

仮面ライダーイーグル ～マスクドストーリー～

2011年10月8日23時33分発行